様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 10 日現在

機関番号：34316
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2011
課題番号：21520060
研究課題名（和文）　日本唯識の転換点―蔵俊・貞慶と法相論義―
研究課題名（英文） The Turning Point of Japanese Consciousness-only Thought: Jōkei, Zōshun, and Hossō Doctrinal Debate

研究代表者
楠　淳證　（KUSUNOKI JYUNSHO ）
龍谷大学・文学部・教授
研究者番号：70214955

研究成果の概要（和文）：**解脱房貞慶を中心とする中世の唯識学侶の研究を通して，全 16 点の研究成果（著書1冊・論文 15 点）を達成し，法相唯識の転換点が蔵俊・貞慶にあったことを明らかにした。その中には，4点の貴重書（古文献）の翻刻読解研究も含まれており，今後の研究に資する大きな成果を世に示すことができた。**

研究成果の概要（英文）：My research focuses on medieval scholar-monks belonging to the Japanese Consciousness–only (Hossō) School, in particular Gedatsubō Jōkei. Over the course of s sixteen publications (one monograph and s fifteen academic articles), I have demonstrated that the period of greatest doctrinal change and evolution within the Hossō School coincided with the careers of Jōkei and his teacher Zōshun. Among my publications, four include annotated editions of previously unpublished manuscripts that will hopefully have a significant impact on future studies of the Hossō School.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	**2,500,000**	**750,000**	**3,250,000**
2010 年度	**400,000**	**120,000**	**520,000**
2011 年度	**400,000**	**120,000**	**520,000**
年度			
年度			
総　計	**3,300,000**	**990,000**	**4,290,000**

研究分野：哲学
科研費の分科・細目：仏教学
キーワード：日本唯識

１．研究開始当初の背景

日本唯識の研究は長らく活字文献によってのみなされてきたが，我々は早くから古大寺や各地の図書館に収蔵されている古文献によって研究していくことが不可欠であるとの認識のもと，研究を進めてきた。かかる観点より研究代表者の楠は，過去 20 有余年にわたって約 2000 点の貴重書（古文献）を蒐集してきた。また，並行して蒐集した古文献による研究を行うことで，種々の新見解を世に問うてきた。具体的には，法相論義の研究や蔵俊・貞慶等の教義思想研究といってよ

いが，その研究過程で明らかとなったのは日本唯識の転換点が，実は蔵俊・貞慶にあったのではないかということであった。これは，良遍に偏重していた昭和年代には見られない研究視点であり，数十の論義テーマを丹念に追った結果の成果であったといってよい。

そもそも，昭和年代における論義の研究は太田久紀氏を除いてほとんどなされていなかった。ましてや，古大寺等に眠る古文献についての調査研究はまったくなされておらず，論義の全体像は不分明であったといってよい。これに対して楠は，１論義テーマについて残されている複数の古文献を１つ１つ丹念に読解し，その時代的思想変遷を研究していった。その結果，良遍より蔵俊・貞慶の方が日本唯識思想上，大きな影響を与えていることを確認したのである。この事実を踏まえて，この度の共同研究を企画実行することにした次第である。

２．研究の目的

日本の唯識教学は論義によって緻密に練り上げられた，それをもとに幾種もの注目すべき思想展開が生じた。その転換点は，はたしてどこにあるのか。我々は，この転換点を蔵俊・貞慶にあると見た上で，蒐集した貴重古文献を翻刻読解し，思想研究を行うことにより，これを明らかにしようと考えた。

法相宗は中国では宗名としても未成立であり，慈恩大師基・淄洲大師慧沼・撲揚大師智周の３代を経て衰退した。しかし，奈良時代に伝えられた日本で法相宗は隆盛を見，ことに本寺である興福寺が藤原氏の氏寺であったことも大きく寄与し，「南都の長」と呼ばれるほどに発展した。その姿は中国３祖の時代のものとはまた異なる独特のものであったといってよい。これまでの研究が少なかったせいか，日本の唯識は中国の「焼き増し」的評価ばかりがなされてきたが，これはたいへんな誤りである。むしろ中国唯識を凌駕する思想を随所で示し，日本独特の展開を見せたというのが実態である。この度の共同研究においては，かかる観点も含め，日本の唯識が自由闊達に論義され研鑽される過程で見せたダイナミックな変容，大きな転換点というものを明らかにしたいと考えた。

３．研究の方法

楠を研究代表者とし，楠が 20 有余年かけて蒐集した貴重書（古文献）を研究分担者である蜷川・新倉・後藤の３名に提供し，これらの貴重資料の中から各研究者が関心あるテーマを厳選し，翻刻読解と思想研究をすることを研究の基本にすえた。そのため，輪読研究や研究発表をしばしば開き，各自の研究ポイントを整理し，これを論理的に組み立て直して論文発表を行っていくことにした。

３年間しかないので，その間に有意義な研究成果を残すことを全員の命題とし，12 点（各自３点）以上の研究成果をあげることを目標に掲げた。その結果，16 点（講読研究１冊を含む）もの研究成果をあげることができた次第である。

４．研究成果

すでに述べたように，我々の３年間の研究成果は実に１６点にものぼる。内訳は，講読本１点，論文 15 点である。いずれも長文が多く，なかでも『南都仏教』第 95 号は我々の研究の集大成といってよい特集号であり，全４篇 285 頁にも及ぶ貴重文献の翻刻読解研究になっている。

この３年間で我々が明らかにしたものは，まず第一に法相唯識の転換点を現出した解脱房貞慶の思想および信仰についてであった。貞慶は法然浄土教を批判した『興福寺奏状』を起草した人物として名高いが，今回の研究によって楠は，その批判背景に法相教義に基づく貞慶自らの弥陀信仰のあったことを明らかにした。また，『興福寺奏状』を起草するにあたって貞慶が，先行して『興福寺奏達状』なる書物を撰述していたこと，その批判の本質は法然の凡入報土義へ向けられていたこと等も明らかにした。実は，貞慶自身もかつて，「二三生等往生」による一種の凡入報土論を構築し，西方を願生していた事実があった。その理論化の書が貞慶撰『安養報化』という論義書である。実は昭和年代より，貞慶に弥陀信仰があったか否かが種々に論じられていた。これに対して４～５年前より，新倉・楠は「貞慶に弥陀信仰はあった」とする研究成果を示してきた。そして，このたびの研究で「自らの愚迷」を自覚する中で貞慶が西方願生を断念せざるをえなくなった経緯，ならびに貞慶の立場よりすれば，法然の凡入報土論は理論が不十分であり，因果の道理を無視する暴論に思われたこと等を論証した。また，貞慶は早くより法然に批判的であったが，それを決定づけたものが「専修の輩による魔界行為」に他ならず，そのことが『興福寺奏達状』ならびに『興福寺奏状』を起草する直接的要因であったことを両書を用いて楠は，思想的・文献的観点より解明を試みた。これを受けて新倉は，このような法然浄土教への批判が澄憲においてすでに見られたことを明らかにし，貞慶の祖父師であった蔵俊が天台一乗思想のみに対して批判の論陣をはったのに対して，貞慶は天台一乗思想のみならず法然浄土教に対しても論陣を構築したところに特色があったと論じた。

そこで我々は，次に一三権実論争に注目することにした。日本の一三権実論争としては，最澄・徳一によるものが有名であるが，この

とき最澄はインドの故事を１つ示して，法相宗を嘲弄した。それは，玄奘が帰朝の際に「五姓各別は真義なのか，中国に伝えてもよいものなのか否か」を戒賢に尋ねたというくだりであり，これをもって最澄は玄奘自身もまた五姓各別を疑っていたと批判したのであるが，新倉が翻刻した蔵俊撰『法華玄賛文集』には，同じ箇所を引いて「戒賢は五姓各別こそが真実である」と述べたあり方が克明に記されている。このことを新倉は新たに指摘し，蔵俊による天台一乗批判，ならびに貶められた『瑜伽論』の復権に心血を注いだのが蔵俊であり，この立場を継承したのが貞慶であったと論じたのである。法相宗の復権は，換言すればまた五姓各別義の復権に他ならなかった。いうまでもなく五姓各別とは，我われ衆生に菩薩定姓・独覚定姓・声聞定姓・不定姓・無姓有情の５類があることを説くものである。すなわち，無漏種子の有無や種類の違いによって，衆生には本質的に５類あるとするものであるが，これは決して「仏に成れない衆生」の存在を力説するものではなく，結局は「菩薩の道を歩め」と教え諭すものであったといってよい。ところが，最澄が天台宗の宗勢を興すにあたって，「南都六宗の長」であった法相宗に挑んだのが大乗戒壇の独立と，他ならぬ一三権実論争であった。ことに，一三権実論争は，最澄のみならず，後には天台宗の良源や源信，あるいは法相宗の仲算や真興らが参戦する論争となり，両宗の重い課題となった。ところが，これについて島地大等が『天台教学史』の中で，「最澄・徳一に始まった一三権実論争は良源・仲算の応和の宗論を経て源信の『一乗要決』に至って決着をみた」と論じたため，真実が隠されて，長らく島地大等の誤説が定説化するに至った。なかんづく，山崎慶輝が論じた「良遍による法相教学の一乗化」という言葉が誤解されて広く伝えられたため，学界では法相宗も一乗的に変容し，何の反論も生じなかったと見なされる傾向に長くあったといってよい。このことを我々は過去にもしばしば批判してきたが，このたび新倉により先に示した蔵俊の『法華玄賛文集』が一部翻刻されることによって，源信以降も蔵俊による厳しい論難が示されていたこと，また蔵俊の理論を継承した貞慶によって三性即三無生の教義を用いた「五姓即一乗」という一乗融会の理論が構築されたこと等を明らかにしたのである。いわば，「五姓即一乗」は新たな法相方の反論であったといってよい。その理論を構築したのが貞慶であることを楠は過去に再三再四にわたって論じてきたが，その源は『解深密経』ひいては『瑜伽論』にあったわけであり，その『瑜伽論』の復権を計ったのがまさしく蔵俊であったと新倉は指摘したのである。

とはいえ，五姓各別であれば，「自己の種姓は何になるのか」「このまま学問・修行を進めればよいのか」と，悩み迷うものもあらわれる。そこで，貞慶は『心要鈔』を著して，この悩みを払拭したと，楠は論じた。すなわち，『心要鈔』「菩提門」において貞慶は，このような悩みを持つ法相の行者に対して，経論の文章などを何度も確認してきたではないかといい，「仏法（唯識）を信じて疑わないのであるから我々は菩薩種姓である」と貞慶がいいきったことを楠は指摘し，天台一乗による五姓各別批判を貞慶は巧妙に退けていたと述べた。そして，この観点より貞慶が法相学侶のための行道体系を構築したものが他ならぬ『心要鈔』であったこと，空の一理（般若）が覚母となり，我々に菩提心を発起させること，真実の菩提心は本有無漏種子であること等を示し，法相宗の行の核心に念仏＝唯識観をすえた行道体系を構築したことを示したのである。

これを受けて後藤は，このような種姓に関する探求が法相学侶の間では広く行われ，種々の観点から論義されていた事実を明らかにした。また，楠は貞慶の信仰が浄土信仰である点に着目し，臨終正念によって来迎を受け，仏道に入るあり方を貞慶が見すえていたことを指摘した。また，新倉は貞慶の信仰には臨終正念が必須のものとしてあるので「同法との契約」がなされたこと等を指摘した。また，蜷川は貞慶の「信」に関する理論に焦点をあて，論義約入仏法について研究を進め，仏道に入る初門に「信」をおいたのが蔵俊・貞慶であったと指摘した。これは，貞慶の『心要鈔』の菩薩種姓自覚の論理に結びつくものであり，たいへん興味深いものであった。

このようにして，貞慶の信仰は仏道の一環であること，そこに教義理論の工夫・構築がなされていること，それによって論義を始とする教学への影響が大きくあらわれ，法相宗の教義思想そのものがダイナミックに一大展開をなしたこと，その源が蔵俊・貞慶にあったこと等々を確認し，立証したのである。かくして，我々は３年間の研究の集大成として，『南都仏教』95 号に各自１点計４点の大作を収録し，法相唯識の転換点がまさしく蔵俊・貞慶にあったことを論証した。いずれも５万字から８万字に達する大作であり，そこには貴重文書の翻刻読解を通した研究成果が示されている。この翻刻読解研究が，我々の行った３年間の成果の集大成たるものであり，これが第３の成果であったといってよいであろう。

すでに述べたように研究代表者の楠は，過去 20 有余年にわたって約 2000 点におよぶ貴重論義資料の蒐集を行ってきた。このたびの科学研究助成を受けた共同研究において，こ

れを全研究分担者に提供して情報の共有をはかり，共に研究を進めてきたわけであるが，それは今後の日本唯識の研究ひいては日本仏教の研究が，貴重文献の翻刻読解研究の上に成り立つものであるとの確信をもっていたからである。そこで，蒐集した資料をそれぞれが吟味し，翻刻読解ならびに思想研究を示すこととし，これをこのたびの共同研究の総括に位置づけた。すなわち，楠は貞慶撰『安養報化』（薬師寺所蔵秘蔵本）を，蜷川は貞慶・蔵俊・勝超の合冊本『見者居穢土』（大谷大学秘蔵本）を，新倉は蔵俊撰『法華玄賛文集』（金沢文庫秘蔵本）を，後藤は貞慶撰『四相違短冊』（東大寺図書館秘蔵本）をそれぞれ翻刻読解しながら，その思想研究を行った。単なる翻刻報告に終わるのではなく，読解（訓読・出拠註・解説）し，その上での思想研究を示すという試みであった。

我々の３年間の研究成果は，実に 16 点にも及ぶ。質・量ともに優れた成果を残すことができたと自負しているが，これもひとえにこのたびの科学研究費による助成のたまものであるといってよい。この成果をもとに再度の申請を出したが，この度は入れられなかったことが残念ではある。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 15 件）

① 楠淳證，貞慶の弥陀信仰再考－本願念仏臨終来迎論と報化二土一体同処論による「凡入報土」の展開－，南都仏教 査読有，第 93 号，2009，ｐｐ1-28，
② 楠淳證，『心要鈔』の撰述年代に関する一考察，龍谷論集，査読有，474･475 合併号，2010 年，ｐｐ123-154
③ 楠淳證，貞慶の観音信仰再考－新資料『観世音菩薩感應抄』を中心として－，日本仏教総合研究，査読有，第８号，2010，ｐｐ9-29
④ 新倉和文，大原談義の成立事情－後白河院，平家の鎮魂のために談義を開く－，岐阜聖徳学園大学仏教文化研究所紀要，査読有，第 10 号，2010，ｐｐ15
⑤ 新倉和文，澄憲と貞慶による法然の凡入報土説批判－後白河院の「往生談義」を中心として－，仏教学研究，査読有，第 66 号，2010，ｐｐ66-89
⑥ 後藤康夫，二種姓における論義の形成と展開，平安仏教学報，査読無，第６号，2010，ｐｐ39-51
⑦ 楠淳證，貞慶撰『安養報化』（上人御草）の翻刻読解研究，南都仏教，査読有，第 95 号，2010，ｐｐ４－89
⑧ 蜷川祥美，貞慶・蔵俊・勝超合冊『見者居穢土』の翻刻研究，南都仏教，査読有，第 95 号，2010，ｐｐ90-126
⑨ 新倉和文，蔵俊による天台一乗批判の展開－『法華玄賛文集』八十九の翻刻読解研究を中心として－，南都仏教，査読有，第 95 号，2010，ｐｐ127-196
⑩ 後藤康夫，貞慶の「因明四種相違」解釈－『四相違短冊』「法自相相違因」翻刻読解研究，南都仏教，査読有，第 95 号，2010，ｐｐ197-285
⑪ 楠淳證，龍谷大学図書館禿氏文庫蔵『興福寺奏達状』について－『興福寺奏状』の草稿本もしくは今一つの「奏状」－，大取一馬編『典籍と史料』，査読有，2011，ｐｐ301-369
⑫ 新倉和文，解脱上人貞慶と同法達との「契約」－龍谷大学図書館禿氏文庫蔵『愚迷発心集』が語りかけるもの－，大取一馬編『典籍と史料』，査読有，2011，ｐｐ401-415
⑬ 後藤康夫，禿氏文庫本『因明十題』について－文庫本欠落箇所に対応する東大寺図書館蔵『因明十題』翻刻を通して－，大取一馬編『典籍と史料』，査読有，2011，ｐｐ361-399
⑭ 蜷川祥美，『論第六巻尋思鈔別要』（写本龍谷大学）中の「約入仏法」について，中西智海先生喜寿記念文書『人間・歴史・仏教の研究』，査読有，2011，ｐｐ383-402
⑮ 楠淳證，貞慶の菩薩種姓自覚の理論と仏道観－新資料「法相宗大意名目」ならびに『心要鈔』等を中心として－，龍谷大学論集，査読有，第 479，2012，ｐｐ48-85

〔学会発表〕（計１件）

① 楠淳證，宗論としての『興福寺奏状』『興福寺奏達状』－法然と貞慶の対立点－，「宗論というテクスト」，2011 年 12 月 23 日，名古屋大学

〔図書〕（計１件）

① 楠淳證，心要鈔講読，査読無，2010，ｐｐ1-449

６．研究組織

(1)研究代表者
楠　淳證（KUSUNOKI JYUNSHO）
龍谷大学教授
研究者番号：70214955

(2)研究分担者
蜷川 祥美（NINAGAWA SACHIYOSHI）
岐阜聖徳学園大学教授
研究者番号：60310661

(3)研究分担者(死去)
新倉 和文（SHINKURA KAZUFUMI）

龍谷大学仏教文化研究所客員研究員
研究者番号：70537050

(4)研究分担者
後藤 康夫（GOTO YASUO）
龍谷大学仏教文化研究所客員研究員
研究者番号：90537052